American ROCK LYRIC LANDSCAPE

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル
イラストレイション=花井祐介

第31回

ボブ・ディラン「ハリケーン」

冤罪で投獄された黒人ボクサー支援の歌（前編）

'Hurricane'
Columbia●3-10245［1975］（7″）
➔ソニー◎MHCP378（"Desire"）

ボブ・ディランの新しいアルバム『テンペスト』は、20世紀以降の最高傑作だと巷ではもっぱらの噂だ。俺も同感だが、それと同時に、このアルバムはまるでアメリカの小さな酒場で出会った、たくさんの思い出を持った浮浪者風のおじいさんの話を聞いているように感じる。最初は彼の71歳の声がひっかかるが、何回も聴いているうちに、その声に導かれるメロディーや歌詞に惹かれていく。さすがボブ・ディラン。彼のストーリーは今でも人の心をつかむ力にあふれている。賢い、面白い、そして彼はまだその年齢で、女性を意識している。大人の色気が漂うのはそのせいだろう。

俺は1956年生まれで、ボブ・ディランとは15歳も違う。そのおかげで、彼の曲を意識的に聴いたのは、彼が30歳近くなってからだ。中学生の頃、誰かが家のビリヤードをやる部屋に置いていった"The Best Of '66 Volume One"というオムニバス・アルバムに、ボブ・ディランのポップなラヴ・ソング「アイ・ウォント・ユー」が入っていた。ボブ・ディランは反戦ソングやプロテスト・ソングで有名だったが、俺はバーズが曲をカヴァーしたソングライター、ぐらいの認識しかなかった。ポップ音楽しか知らない中学生にとって、ボブの存在はさほど大きくない。俺は彼のアルバムを買いに行ったが、ボブはその頃、カントリーの『ナッシュヴィル・スカイライン』をリリースしていて、ちょっとがっかりした。カントリーそのものだった。その次は『セルフ・ポートレイト』で、もっと分からなくなってしまった。ポップな「アイ・ウォント・ユー」の音とは、かけ離れたスタイルだった。その後、この「アイ・ウォント・ユー」が入っているアルバム『ブロンド・オン・ブロンド』を買って彼のことを少しずつ理解するようになった。そして新しいアルバムが出るたびに手に入れ、同時に昔のアルバムを買い足していった。そのたびに俺は彼の怒りを知るようになり、ちょっと寂しさを覚えた。俺もその頃のボブを

リアルタイムで聴きたかった。その時代の空気、環境を体験したかった。ボブが71年にプロテスト・ソングの「ジョージ・ジャクソン」をリリースしたときも、俺は韓国に住んでいてあまりこの曲を聴くチャンスがなかった。でもたとえ聴いても、若くて理解できなかっただろうけど。

今回取り上げた「ハリケーン」は、俺をそんな欲求へと駆り立てたボブ・ディランが、いろんな意味でアメリカに問題提起した作品だ。66年にニュージャージーで起こった殺人事件の罪をかぶさられ、19年もの間、刑務所に入れられていたあるボクサーを描いている。そのボクサーの名はルービン・カーター。〝ハリケーン〟とは、彼のリングネームだ。彼は無実だと訴え続け、85年にやっと無罪判決を勝ち取った。ディランが75年に出した、カーターの冤罪を歌ったこの曲で、事件がアメリカ中に知れ渡り、問題視されるようになった。99年には、この事件をテーマにしたデンゼル・ワシントン主演の映画『ザ・ハリケーン』も大ヒットした。

この作品が世に出た頃、俺はアメリカに住む二十歳の学生だった。この曲は巷ですごく話題になった。この曲のおかげで、アメリカ人たちはそのボクサーのことを知り、アメリカの司法制度はまだまだパーフェクトではないと、もう一度考え直すことになった。俺といえば、この曲でボブの怒りに触れ、その声をようやくリアルタイムで聴くことができたと、少し満足感を覚えた。

では曲に入ろう。

Pistol shots ring out in the barroom night
Enter Patty Valentine from the upper hall
She sees the bartender in a pool of blood Cries out, "My God, they've killed them all!"

≪酒場の夜にピストルの音が響き渡る≫。この'ring out'は、鐘が鳴るような感じだ。≪パティー・ヴァレンタインが階上のホールから降りてきて、バーテンダーが血溜まりの中に倒れているのを見る≫。'upper hall'は、きっと2階にあるパーティー会場か何かだろう。ここで凄いのは、このパティー・ヴァレンタインが実際の目撃者の実名だということだ。そこで彼女は叫び出す。≪なんてことのなの、みんな殺されている！≫。

Here comes the story of the Hurricane
The man the authorities came to blame
For somethin' that he never done
Put in a prison cell, but one time He could-a been
The champion of the world

≪ハリケーンの話はここからだ≫。ここでの'here comes'は〈おい見ろ、おい聞け〉というニュアンスだ。≪彼こそが権力者が罪を被せようとした人物。彼は何もしていないのに≫。'authorities'は、警察や裁判所または国家のトップの人たちのことを指す。'came to'はよく使う言葉で、…になったという意味。例えば'came to nothing'は、〈何にもならなかった〉。≪刑務所に入れられなければ、彼は世界チャンピオンになれたのに≫。ここでの〝彼〟とは、もちろん、ルービン・カーターのこ

とを指す。

Three bodies lyin' there does Patty see
And another man named Bello, movin' around mysteriously
"I didn't do it," he says, and he throws up his hands
"I was only robbin' the register, I hope you understand
I saw them leavin', "he says, and he stops
"One of us had better call up the cops"
And so Patty calls the cops
And they arrive on the scene with their red lights flashin'
In the hot New Jersey night

≪パティーは3人の体が横たわっているのを見た。そして、もう一人のベロウという名の男が怪しげに動き回っている。彼は〝俺はやっていない〟と言って手を上げた。〝俺はただレジの金を盗んでいただけだ、わかってくれるだろう。俺はやつらが出て

行くのを見たんだ〟と言って息をつぎ、〝誰かが警察を呼ばないと〟≫。'cops'は警察のこと。この言葉はニューヨークの警察が昔'copper'と言われる銅のバッヂやボタンを付けていたから、警察=コップと呼ばれるようになったと言われているが、どうやらそれは違うらしい。捕まえるという意味の'cop'からくるようだ。とはいえ、この言葉には警察を軽視するようなニュアンスがあるのであまり使わない方がいい。話はそれたが、そこでパティーが警察を呼ぶ。≪暑いニュージャージーの夜、赤いライトを光らせながら、彼らは到着した≫。

Meanwhile, far away in another part of town
Rubin Carter and a couple of friends are drivin' around
Number one contender for the middleweight crown
Had no idea what kinda shit was about to go down
When a cop pulled him over to the side of the road
Just like the time before and the time

before that
In Paterson that's just the way things go If you're black you might as well not show up on the street
'Less you wanna draw the heat

≪一方、遠く離れた街の、ある場所では、ルービン・カーターと二人の仲間がドライヴをしていた≫。'drivin' around'は、目的なしで車を運転することだ。≪ボクシングのミドルウェイト級選手のナンバー・ワンを狙う選手。警察に道路の横に止められた時は、これからどんなとんでもないことが起こるかまったく想像ができなかった≫。'shit about to go down'は、≪何かとてつもなく良くないことが起きる≫ということ。≪この前もそうだったし、その前のときもそうだった。パターソンではありがちなことだ≫。パターソンはハリケーンが生まれ育って、今も住んでいる町の名だ。≪もし君が黒人で、警察ともめたくなかったら、ストリートには出て来ない方がいい≫。'heat'は警察のことで、'draw the heat'とは≪警察を引き寄せる≫、つまり警察とひと悶着起こす、という意味だ。

Alfred Bello had a partner and he had a rap for the cops
Him and Arthur Dexter Bradley were just out prowlin' around
He said, "I saw two men runnin' out, they looked like middleweights
They jumped into a white car with out of state plates"
And Miss Patty Valentine just nodded her head
Cop said, "Wait a minute, boys this one's not dead"
So they took him to the infirmary
And though this man could hardly see
He told him that he could identify the guilty men

≪アルフレッド・ベロウには仲間がいて、彼は警察に逮捕されたことがある。彼とアーサー・デクスター・ブラッドリーはただうろついていた≫。ここでまたアーサーという実名を出している。ベロウは警察にこう言った。≪ミドルウェイト級のボクサーみたいな人に見えた、その二人の男が走って行くのを見たんだ。違う州のナンバーで、白い車に飛び乗った≫。'out of state'とは違う州のこと。'plates'は皿ではなく、ナンバー・プレートだ。≪そこでミス・パティー・ヴァレンタインは、ただ頷いていた≫。彼女は階上にいたのに、こんなうそに同調している。ここで警官が言った、≪ちょっと待てよ君たち、この人は死んでいない≫。ここで'boys'を使っているが、これは男の子ではなく、大人の仲間に使う言葉だ。'this one'は物ではなくて人のことを指している。≪そこで彼らは彼を病院に連れて行った。その男はほとんど目が開かなかったが、罪を犯した男は識別できると言った≫。

残念ながらここで紙幅が尽きてしまった。続きは次号で！

ジョージ・カックル／GEORGE COCKLE
ラジオ・パーソナリティ。1956年、鎌倉生まれ。18歳で新宿2丁目のロック・バー＜開拓地＞で、音楽の世界にのめり込む。ハワイアンなどのCDをプロデュースする傍ら、インターFMでは音楽番組「レイジーサンデー」のパーソナリティをつとめ、音楽通ぶりを披露。さらにサーフ・イヴェントなどのMCでも活躍。
http://whatsupmusicinc.com

著作権クレジット????